



— 第6話 続・私説「岡田隆介」論 —

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

前号からの、私説「岡田隆介」論の続きです。前号に岡田さんの治療スタイルや、それを構成してきたであろう個性的な源泉みたいなものを書いてみました。個人的な岡田さんとの関わりから膨らませた私の思い込みとされるような言説と言われればそれまででしょう。しかしながら、書けば書くだけ私の中では、リアリティを帯びてくるのはなぜでしょう。そして、とにかく、岡田さんのメタファーは、「予想外の言葉による予期せぬ展開」を起こしうる何かを持っていると思います。今回は、その予想外のメタファーの持つチカラの解説から入ってまいりましょう。

1. 珠玉のメタファー

「カシオペア」、単に星座の名前ですが、これを岡田さんは巧妙にさりげなく、ある臨床事例検討の展開の中で使っていきます。時は2007年11月、場所は岡田さんの第二の故郷とも言える大阪、正確には事例検討会ではなく、当連載でも何度も紹介して

いる「そだちと臨床」誌の企画による座談会の中での発言です。

座談会に先立つこと、2007年5月に京都で開催された第24回日本家族研究・家族療法学会で一つの症例発表がされました。大内雅子さんの「母と子の6年間を振り返る」という症例発表に岡田さんが助言者として参加されてました。大内さんから、心理職として6年間に渡り、女兒(心理療法開始時期は、女兒は小学校一年生)との心理治療記録と児童養護施設での生活記録が、語られました。当時としては児童養護施設に心理職を常勤採用するのは先進的なことだったでしょう。また、その施設は伝統と格式のある養護施設であり、そこに新米心理士として着任すること、その女兒の事例は、困難事例でありながらも、施設で育たざるを得ない子どもたちが抱えるであろう共通項も多く抱えている事例であること、しかも舞台は、港ヨコハマ。こんなナラティブ、我々が岡田さんが燃えないわけではないと、今思い返してもそう思います。この大内さんの

事例発表、岡田さんのコメント、それを受けての企画座談会の一連について詳しく知りたい方は、「そだちと臨床 Vol.4」の特集記事「社会的養護と心理職の役割」(※1)をご覧ください。

さて、岡田さんのメタファーは、この特集記事の随所から拾い上げられます。学会の事例発表でのディスカッションが時間的な制約等で深まりを欠いたことから、その補完作業の意味も込めて企画された特集です。その深まりを欠いた不全感に対して、岡田さんは以下のようにコメントします。“「大内さんは、(学会発表において)何かを持ち帰ることができただろうか」という胃もたれ+残尿感的な思いを広島まで持ち帰ったものですから、今回の企画はとてもうれしかったです”。このメタファーは、前菜でありメインではありませんが、実に巧妙です。岡田さんには、生理現象に訴えるメタファーは多いです。人間ですから、自分に引き寄せやすい。それも、広島という具体的な場所を引き合いに出し、距離と時間を、生理現象と対提示する。聞いた人は、「広島までは無理じゃけ、岡山あたりでもどすか、漏らすか」と思うでしょう(思わないか)。この事例に対するコメントや、大内さんや他の参加者を含んだ座談会のなかで、岡田さんが終始やろうとしていることは、児童養護施設の中に普通にある「哀しい過去・しんどい日常・樂觀的になれない未来」から当事者や周囲にとって「好都合な現実」を紡ぎだそうとする作業だと思います。こうした意味の再構築には、臨床家としての若干の心意気と戦略を加味した上でのクライアントの語りへの重ね合わせが必要だと記述されています。私は、そのための戦略の大きな要素が岡田

さんの秀逸なメタファーにあると考えています。

さて、珠玉のメタファーの続きです。この座談会での事例理解のために岡田さんが投げた大きな仕掛けは、『絵』で例えることです。同じ語りであっても描き方で、絵は違ってくるといえるものです。しかし、ここまでなら想定内、誰でもが語りそうですね。この事例もそうですが、われわれが接する心理面接では、クライアントは(心理的に)重い絵を見せに来る、見せたがると岡田さんは言います。たしかに、悩みの相談ですから楽しい絵を見せる目的で来る人はいませんよね。で、一般論での心理面接で描かれる悲しい『絵』は、大内さんの事例になぞらえられると、「カシオペア座」という具象を与えられます。形容は「寒い冬の」です。事例の女兒と母親のヒストリーは、まさに「寒い冬のカシオペアを眺めるがごとき」でしょう。ここでセラピストが「先生にも見えるよ」と言ってしまうとストーリーは完成する。さらにセラピストとクライアントでカシオペア座の中にある未来の話を広げていくことで、絵を完璧なものとする、岡田さんは発言しています(例えば「一人で強く生きていこうね」的な方向性もその一つです)。私は、この辺りは、心理面接の常套でもあり、よくある運び方で、全く否定する必要はないと思います。しかし、この「カシオペア座制作」ばかりに留まって、もう味がしなくなったガムを噛み続けるような共同作業のなんと多いことか。岡田さんは、はっきりと「こういうのは(こういう運び)はイヤだから」と座談会の中で発言しています)。では、どうするのか?周りの小さくて目立たない星に注意を向けるようクライアントに働きか

けることだと言います。この小さくて目立たない星というのは、女兒の中で理想化された母親像ではなく、手紙とか面会とか一時帰宅を経る中での母親に対する別の形容です。それは、「あの人」、「ババア」、「お母さん」といった表現です。そして、母親以外の人、施設の先生に対して「たまにお母さん」という形容を指摘しています。相対化することができる言葉を巧みに岡田さんはマッピング（星を拾い上げる行為）しています。ここでの大事なところは、女兒本人から出た言葉であること、あるいは女兒のセラピストである大内さんが、女兒がそう言ったと認識している言葉でなければ意味がありません。岡田さんの語りを続けるならば、このマッピングから得られる星座は、定番のカシオペア座のW形の外側にある星々から生起してくると考えられます。母親を「母は永遠に母」としてWの中の星として位置付けるのではなく、Wの外にある星を拾い上げることで、母親に「完全でなくても母親」、「離れていて思い出だけでも母親」、「そして他人でも母親以上になれる」という新しい意味付けが生まれてきているのだと座談のなかで大内さんに伝えています。この一連のメタファーが、女兒のセラピストである大内さんの中に、落とし込まれるというところまでを持って、岡田さんの胃もたれ+残尿感からの解放ということになっています。たぶん、このメタファーは、その後の大内さんの女兒とのセラピーや、それ以外の女兒との関係の場において、有形無形に、意識無意識下に、影響を与えたことだろうと推測されます。

こうした「珠玉のメタファー」の処方は、私に、かのミルトン・エリクソンの一連のメ

タファーを思い出させます（岡田さんの“やめろや”と恥ずかしがる声が聞こえそうですが）。というのも、エリクソンという人は、患者一人一人に合った理論や治療法を探し続けた人だとよく評伝なんかには書かれています（※2）岡田さんも自分の治療スタイルを、「料理人」や「服の仕立て屋」になぞらえることは前回の5話で取り上げました。今回のこの「カシオペア座」に繋がるメタファーは、単なる例えや言葉の言い換えではなく、「母と子のヒストリー」の組み換えを孕んだ大きな枠組みのものです。また、同時にそれを眺める治療・支援する側の人たち（我々）の眺め方の枠組み換えにも挑戦しているようにも思います。夜空という大きなキャンパスに、予定調和の「カシオペア座」だけを見るべくして見るのではなく、星（差異）のマッピングによっては、もっと自由にもっと多様に、脱「カシオペア座」が可能なことを我々に教えようとしてくれているようにも思えるのです。このような脱「カシオペア座」のメタファーは、もとはと言えば、学会で岡田さんがコメンテーター役をしたことに端を発し、「そだちと臨床」という雑誌の座談会企画の場を借りて、広げられたものです。そういう意味では、最初は大内さんに向けて、同時に座談会参加者に、さらに関係者（私はこのフェーズの人でしょう）、さらには雑誌の読者諸氏にまで伝わっていったと思っています。岡田さんには一切そうした意図はないとは思いますが、私自身がそう感じているという事実は確固としています。「カシオペア座」しか見えなかったものが、別の星座が浮かび上がってくる、そんな臨場感を追体験させてもらった感じがします。それは、私の読み取り方の例

を挙げるまでもないでしょう。迷いながらも、少しでもマシな心理面接をしたいと願うセラピストにとって、いつもの「カシオペア座」とは違う星座を探す助けに繋がる事例の読み取りであると思います。岡田さんのメタファーには常にそうした輝きがあるように感じます。不思議なことにミルトン・エリクソンで連想するのは、また違った意味合いですが、岡田さんの盟友、団士郎さんの中にも強く感じられるところです。このくだりは、長くなりますので、また別の先の機会に譲らせていただきます。

2. 岡田流メタファーに魅せられて

魅せられながら、何十年も心理士業を営んできましたが、たまにヒットは打つけど、強打者にはなれんなというのが、現時点の私です。前述の「珠玉のメタファー」の文章をまとめていると特にそういった感慨に至ってしまいます。ヒットはそうそう打てないけれど、今回、自分勝手な切り口でも解説できる機会が与えられたことはほんとうにうれしい限りです。岡田流メタファーの作り方は、ユーモア(お笑いとも言ひ換えられる)＋意外性＋美的センス＋語り＋実は知識＋失敗体験＋熱量。今思い起こせるのはこんな要因かと考えます。

今回、結局、前回からの続きで「岡田隆介によるメタファー生起過程に関する一考察」的な文章となってしまいました。岡田さんと会っていても、ほんと学術的な欠片もない、ここには載せられないような馬鹿話しかしてきてはいないので。しかし、その裏にある理系的な側面(なんといってもお医者さまなのでから)、普段は語られない面

接における理論的な背景(もっと語れや)、人となり、趣味などについて、次号回しとしたいと思います。よって、今回は人間・岡田に激しく迫っていかうと考えております。乞うご期待！



※1

「私は、一人一人のために新しい理論と新しい治療法を開発します」

Milton H. Erickson (Lankton and Lankton, 1983:v)

『ミルトン・エリクソン その生涯と治療技法』(2003、金剛出版) ※2